

トランスジェンダー児童生徒の学校生活における性別違和の存在 と学校環境整備の必要性

— FtMの抱える困難の実態を通して (第1報) —

竜 田 奈々子 大阪府立懐風館高等学校
立 松 麻衣子 奈良教育大学家庭科教育講座

Gender Dysphoria in School Life of Transgender Students and the Need of the Improvement School Environment

— From the actual situation of discomfort that FtM has (1st report) —

TATSUTA Nanako

(Osaka Prefectural Kaifukan Senior High School)

TATEMATSU Maiko

(Department of Home Economics Education, Nara University of Education)

Abstract

Regardless of sexuality, there is an urgent need to improve the school environment so that students can lead a school life without discomfort. Therefore, in this study, we analyzed the factors of gender dysphoria in the school life of FtM parties.

We surveyed 15 FtM parties through questionnaires and interviews to understand their gender dysphoria in school life. The survey period was from 19th September to 27th October, 2021.

Many of the FtM parties were uncomfortable in school life with "toilet," "changing room," and "swimsuit", regardless of elementary, junior high, or high school. In the "toilet" and "changing room", discomfort was caused by [distinguishing by physical sex], [line of sight from others], [characteristics of the place], and [difference between gender identity and space]. "Swimsuits" were uncomfortable due to [distinguishing by physical sex] and [line of sight from others]. In addition, many of the parties were uncomfortable with "uniforms" in junior high and high school. "Uniforms" and "school supplies" were uncomfortable due to [distinguishing by physical sex] and [gender]. It would be possible to adopt "school supplies" that do not form gender awareness, "uniforms" with genderless designs, and "swimsuits" with less exposure and emphasis on the body. In order to reduce gender dysphoria in the "toilet" and "changing room", it is necessary to devise a space design.

キーワード：トランスジェンダー, 児童生徒, 性別違和,
学校環境整備

Key Words : transgender, student, gender dysphoria,
improvement of school environment

1. はじめに

身体的性と性自認が異なり, それらに対して医学的な診断を受けた状態及びその診断名を「性同一性障害」という。性同一性障害のなかで, 身体的性が女性であり男性へ性別移行することを望む人, また望んで手術を

終えた人のことを「FtM (FemaletoMale)」という。また, 身体的性が男性であり女性への性別移行することを望む人, また望んで手術を終えた人のことを「MtF (MaletoFemale)」という。性同一性障害が身体への違和を強調した疾病概念であることに対し, 社会的な性別違和を強調するとともに脱病理化の主張を込めて当事

者がつくりだした言葉に「トランスジェンダー」がある⁽¹⁾⁽²⁾。本報では、身体的性と性自認が一致しないことによる違和感（性別違和）を持つ人のことを広く「トランスジェンダー」と表記し、受診の有無は問わないこととする。そして、身体的性から自認する性への性別移行を望む人をそれぞれ「FtM」「MtF」と表記し、手術の有無は問わないこととする。

学校現場では、FtMの58.3%、MtFの85.7%がいじめの被害に遭ったことがあり、FtMとMtFの半数以上が不登校になった経験があると報告されている⁽³⁾。自傷行為や自殺、自殺未遂に追い込まれるケースもある。平成26年度に文部科学省から「学校における性同一性障害に係る対応に関する状況調査について」（以下、「平成26年度文科省報告」と表記する。）が発表された⁽⁴⁾。この報告書では、学校にカミングアウトをしたトランスジェンダーの児童生徒を対象に行った全国606件の配慮例が公表されている。翌年に通知された「性同一性障害に係る児童生徒に対するきめ細かな対応の実施等について」では、「性同一性障害に係る児童生徒については、学校生活を送る上で特有の支援が必要な場合があることから、個別の事案に応じ、児童生徒の心情等に配慮した対応を行うこと」と通知された⁽⁵⁾。その文書において記されている支援例は、自認している性別の服装を認めることや呼称の工夫、活動への参加の配慮といったものであった。これらの配慮事項は、男女の二元的理解を前提とした従来の学校教育が運用してきた規則や慣習の対応・指導上の支援内容であることが指摘されており⁽⁶⁾、また、カミングアウトをした児童生徒への支援内容であることが限定的である。

カミングアウトに対しては、生活や仕事に支障がなければカミングアウトをしたい（25.7%）、必要ない（40.1%）という当事者の様々な思いがあるが、実際には誰にもカミングアウトしていないという当事者が多いことも報告されている（78.8%）⁽⁷⁾。自分のセクシャリティを他人にアウトイング（曝露）されることをおそれてカミングアウトしないケースもある。現状では、学校にカミングアウトをしないまま、つまり、性別にもとづく扱いの差異に配慮を受けることなく学校生活を送っているトランスジェンダー児童生徒がいることが推察される。彼らは、学校の性別にもとづく扱いの差異に従わなければならないという現実と、自らがやりたい性別で学校生活を送りたいという欲求の間で葛藤を起こしている⁽⁸⁾。セクシャリティのカミングアウトの有無にかかわらず、多くの児童生徒がストレスを感じることなく学校生活を送れるような学校環境整備が急務である。

性別にもとづく扱いの差異の強制力は男性と女性で異なり、ジェンダー葛藤のありようはFtMとMtFでは異なることが指摘されている⁽⁸⁾。本研究では、トランスジェ

ンダーに配慮した学校環境整備に向けた基礎資料として、まずは、FtM当事者の性別違和によって生じている学校生活の困難と、その困難の構成要素を抽出することとした。

2. 研究方法

(1) 調査対象者

筆者がFtM当事者1名に調査への賛同を得られそうな同じセクシャリティの知人1名（X）の紹介を依頼した。紹介されたXに対して筆者が調査の目的と方法、調査内容等を説明し、調査の同意を得て、調査対象者とした。以降はXからY、YからZと数珠つなぎのように筆者への紹介を依頼し、筆者から各人への調査の説明と同意を得て調査を実施した。あらかじめ設定していた調査期間内に15名の紹介を得て、調査の同意を得た15名を調査対象者とした。

(2) 調査方法

FtM当事者の学校生活における性別違和の実態を把握するために質問紙調査とインタビュー調査を行った。調査対象者への質問紙の配付と回収はインターネットにより行い、回収した質問紙を用いた半構造化インタビュー調査を対面またはオンラインにより実施した。調査期間は2021年9月19日～10月27日だった。

(3) 調査項目

①性別違和の気づきと確信

- ・時期
- ・きっかけ
- ・カミングアウト（有無、相手、時期等）

②学校生活で困難を感じていたこと

平成26年度文科省報告⁽⁴⁾の配慮例を参考にして調査項目を設定した。質問紙では、制服、髪型、学用品、トイレ、更衣室、水着、体育の授業、その他の授業、名簿、行事、その他、の調査項目をあげて、それぞれについて小学校、中学校、高等学校時代に困難を感じていたかどうかを把握した。さらにインタビューによって、どのような困難を抱いていたのかを詳細に把握した。

(4) 調査対象者の概要

FtM当事者15名の平均年齢は25.0歳（SD3.8）であった。すべて性自認は男性であった。現在の身体的治療の有無と戸籍の性別変更の有無について表1に示す。「ホルモン治療」を行っているものは93.3%、「乳房切除」の手術を行っているものは66.7%であった。さらに、「子宮・卵巣摘出」の手術を行っているものは40.0%であり、そのものはすべて「戸籍の性別変更」を行っていた。

(5) 分析方法

セクシャリティに気付いたきっかけと確信したきっかけについては自由記述の方式で把握し、その内容につい

表1 身体的治療と戸籍の性別変更

	行っている	行っていない	計
ホルモン療法	93.3	6.7	100.0
乳房切除	66.7	33.3	100.0
子宮・卵巣摘出	40.0	60.0	100.0
戸籍の性別変更	40.0	60.0	100.0

n=15, (%)

表2 性別違和の気付きと確信の時期

	気付き	確信
7歳まで	46.7	6.7
7・12歳	46.7	20.0
13・15歳	6.7	6.7
16・18歳	0.0	40.0
19歳以上	0.0	26.7
計	100.0	100.0

n=15, (%)

表3 気付きから確信までの期間

0・4年	20.0
5・9年	33.3
10・14年	40.0
15年以上	6.7
計	100.0

n=15, (%)

てインタビューで詳細を把握した。そして回答内容の類似性からカテゴリ化を行った。

高等学校時代の状況を把握する分析では、高等学校に進学をしていない者1名と現在高校生である者1名を分析対象から除いた（n=13）。

調査項目を提示して把握した学校生活での困難と、小学生・中学生・高校生時代の別との関連はCochran's Q testにより3校種間の比率を検定した。有意水準は両側 $p<0.05$ とした。また、Bonferroni correctionによる調整済み有意確率からペアごとの比較を行い、どの校種間に有意差が認められるのかを調べた。

インタビュー調査によって詳細を把握した学校生活での困難については、回答内容の類似性によりカテゴリ化を行い、学校生活における困難の構成要素を抽出した。

(6) 倫理的配慮

本調査では、FtM当事者から同じセクシャリティの知人を筆者に紹介してもらうことを重ねて15名を調査対象者とした。筆者に紹介してもらう前に当事者間のやり取りにおいて本調査について話をしてもらい、被紹介者の同意を得たうえで、性に関する個人情報と連絡先を紹介者から筆者に提供してもらった。そして、筆者から正式に調査目的と方法、調査内容等を口頭で伝え、参加は自由意志によるものであること、不利益を受けずにいつでも撤回できることを説明して本人の同意を得た。未成年者の場合には保護者の同意を得たうえで調査に協力をしてもらった。本調査は、奈良教育大学「人を対象とする研究倫理審査委員会」の承認を得た（受付番号4-7）。

3. 結果

3.1. 性別違和の気付きと確信の時期

性別違和に気付いた時期は、「7歳まで」「7-12歳」がともに46.7%であり、中学校卒業までにはすべてが気付いていた（表2）。性別違和を確信した時期は、「7歳まで」6.7%、「7-12歳」20.0%、「13-15歳」6.7%、「16-18歳」40.0%、「19歳以上」26.7%であった。

性別違和の気付きから確信までの期間は「0-4年」20.0%、「5-9年」33.3%、「10-14年」40.0%、「15年以上」

6.7%であった（表3）。

3.2. 性別違和の気付きと確信のきっかけ

(1) 気付き

服装、色、持ち物について、周囲から決めつけられることへの違和感から性別違和に気付いたという回答が53.3%であった（表4）。その他、使用するトイレに対する違和感、名前に対する違和感という回答をあわせて、『性別にもとづく扱いの差異に対する違和感』というカテゴリを抽出した。このカテゴリには73.3%の回答が該当した。

同様に、女性らしい身体つきへの違和感、男性らしい身体の特徴が出現しないことへの違和感の回答から、『身体的性に対する違和感』というカテゴリを抽出した（13.3%）。好きになる人が女性だったことへの違和感の回答からは『性的指向』（6.7%）、自分は男性だという認識があったという回答からは『性自認』（6.7%）というカテゴリを抽出した。

(2) 確信

性別違和に確信したきっかけについては、テレビ、SNS、小説で自分と同じセクシャリティの存在を知り確信したという回答をあわせると40.0%であった（表5）。その他、パートナーからFtMというセクシャリティを教えてもらったという回答をあわせて、『ロールモデルとの出会い』というカテゴリを抽出した。このカテゴリには46.7%の回答が該当した。

同様に、好きになった人が女性だった、レズビアンパートナーから彼氏として扱われたいと思ったという回答から、『性的指向・パートナーとの関係』というカテゴリを抽出した（26.7%）。診断によって確信したという回答からは『診断』（13.3%）、自分の女性らしい身体や女子制服に対して嫌悪感を抱いたことで確信したという回答からは『嫌悪感』（13.3%）というカテゴリを抽出した。

3.3. 性別違和のカミングアウト

性別違和の気付きから確信までの間にカミングアウトをしたという回答は1名（6.7%）、性別違和を確信した後にカミングアウトをしたという回答は11名（73.3%）

表4 性別違和に気付いたきっかけ

カテゴリ	サブカテゴリ	
性別にもとづく扱いの差異に対する違和感 (73.3%)	服装・色・持ち物	53.3
	使用するトイレ	13.3
	自身の名前	6.7
身体的性に対する違和感 (13.3%)	女性らしい身体つき	6.7
	男性らしい身体の特徴が出現しないこと	6.7
性的指向に対する違和感 (6.7%)	好きになる人が女性	6.7
性自認 (6.7%)	男性としての性自認	6.7
計		100.0

n=15, (%)

表5 性別違和を確信したきっかけ

カテゴリ	サブカテゴリ	
ロールモデルとの出会い (46.7%)	テレビ	20.0
	SNS	13.3
	小説	6.7
	FtMについて教えてもらった	6.7
性的指向・パートナーとの関係 (26.7%)	好きな人ができた	20.0
	彼氏として扱われたい	6.7
診断 (13.3%)	診断	13.3
嫌悪感 (13.3%)	女性らしい身体への嫌悪	6.7
	女子制服に対する嫌悪	6.7
計		100.0

n=15, (%)

表6 学校生活で困難を感じていたこと

項目	総数(件)	小学校 (%) (n=15)	中学校(%) (n=15)	高等学校(%) (n=13)	1)
制服	28	20.0	93.3	84.6	*
トイレ	25	53.3	60.0	61.5	
更衣室	19	46.7	46.7	38.5	
水着	17	46.7	40.0	30.8	
学用品	7	26.7	6.7	15.4	
行事	6	13.3	20.0	7.7	
髪型	4	0	13.3	15.4	
体育の授業	3	0	13.3	7.7	
名簿	1	6.7	0	0	
その他の授業	1	6.7	0	0	
その他	1	0	6.7	0	

1) Cochran's Q test *:p<0.05

複数回答

であった。この12名がカミングアウトをした対象は、親(10名)、友人・知人等(SNS含む)(5名)、教員(1名)であった。そのうち5名は中学生・高校生の時に親にカミングアウトをした。

カミングアウトをしていないという回答は3名(20.0%)であった。このうち2名は、周囲が性自認にあった振る舞いを受け入れてくれたため、敢えてカミングアウトをする必要がなかったと回答した。

3.4. 学校生活で困難を感じていたこと

小学校、中学校、高等学校の各段階において学校生活で困難を感じていたことを、表6に示す項目を提示して複数回答形式で問うた。小学校の段階では「トイレ」53.3%、「更衣室」46.7%、「水着」46.7%、「学用品」26.7%の順に回答が多かった。中学校の段階では「制服」93.3%、「トイレ」60.0%、「更衣室」46.7%、「水着」40.0%の順に回答が多かった。高等学校の段階では「制服」84.6%、「トイレ」61.5%、「更衣室」38.5%、「水着」

30.8%の順に回答が多かった。

小学校、中学校、高等学校の3校種間と各困難項目の関連を分析したところ、校種と「制服」の間に有意差が認められた($p<0.05$)。さらにペアごとの比較では、小学校と中学校の組み合わせが有意であった($p<0.01$)。

3.5. 学校生活での困難の構成要素

学校生活でどのような困難を感じていたのかをインタビューによって詳細に把握し、回答内容の類似性によって、学校生活での困難の構成要素を分析した(表7)。

3.5.1. 男女の区別

男女の区別そのものが困難だったという回答は、トイレのマーク、更衣室、水着、体育の授業(水泳)、トイレ、学用品、行事、制服(帽子)、名簿、その他の授業、その他、から得られた。性別にもとづく差異に関するこれらの回答から、【男女の区別】というカテゴリを抽出した。このカテゴリには25.6%の回答が該当し、それらは小学校・中学校・高等学校のいずれの段階からも出現した。

表7 学校生活での困難の構成要素

カテゴリ	サブカテゴリ	項目	総数		学校段階別(件)		
			(件)	(%)	小学校	中学校	高等学校
男女の区別 (25.6 %)	男女の区別	トイレ(マーク)	10	5.8	3	4	3
		更衣室	8	4.7	2	4	2
		水着	6	3.5	3	1	2
		体育の授業(水泳)	5	2.9	0	3	2
		トイレ	4	2.3	1	1	2
		学用品	4	2.3	1	1	2
		行事	3	1.7	2	1	0
		制服(帽子)	1	0.6	1	0	0
		名簿	1	0.6	1	0	0
		その他の授業	1	0.6	1	0	0
		その他	1	0.6	0	1	0
	計	44	25.6	15	16	13	
ジェンダー (25.0 %)	服装	制服(スカート)	24	14.0	1	12	11
		制服(セーラー)	4	2.3	0	4	0
		制服(リボン)	4	2.3	0	0	4
		制服(帽子)	1	0.6	1	0	0
	髪型 色	髪型	4	2.3	0	2	2
		学用品	5	2.9	4	0	1
		制服(帽子)	1	0.6	1	0	0
		計	43	25.0	7	18	18
周囲の視線 (21.5 %)	身体を見られること	水着	12	7.0	6	4	2
		更衣室	5	2.9	2	2	1
		行事	4	2.3	1	2	1
	空間内外での視線	トイレ	11	6.4	4	4	3
		更衣室	5	2.9	2	2	1
		計	37	21.5	15	14	8
場の特徴 (18.6 %)	女子が集まること	更衣室	11	6.4	3	4	4
		トイレ	11	6.4	3	4	4
		行事	4	2.3	1	3	0
		その他	1	0.6	0	1	0
	距離が近いこと	トイレ	4	2.3	1	1	2
		更衣室	1	0.6	1	0	0
		計	32	18.6	9	13	10
	性自認と空間の相違 (9.3 %)	漠然とした嫌悪	更衣室	6	3.5	2	2
トイレ			1	0.6	1	0	0
性自認		トイレ	4	2.3	1	2	1
		服装	3	1.7	1	0	2
性的指向		トイレ	1	0.6	0	0	1
		友人関係	1	0.6	1	0	0
計		16	9.3	6	4	6	
合計			172	100.0	52	65	55

3.5.2. ジェンダー

「服装」が困難だったという回答は、制服のスカート・セーラー・リボン・帽子から得られた。「髪型」の校則に対する困難もあった。「色」が困難だったという回答は、学用品と制服の帽子から得られた。「服装」「髪型」「色」に関するこれらの困難から、【ジェンダー】というカテゴリを抽出した。このカテゴリには25.0%の回答が該当し、それらは小学校よりも中学校・高等学校の段階から多く出現した。

3.5.3. 周囲の視線

「身体を見られること」が困難だったという回答は、水着、更衣室での着替え、修学旅行での入浴から得られた。「空間内外での視線」が困難だったという回答は、トイレと更衣室から得られた。「身体を見られること」「空間内外での視線」に関するこれらの困難から、【周囲の視線】というカテゴリを抽出した。このカテゴリには21.5%の回答が該当し、それらは高等学校よりも小学校・中学校の段階から多く出現した。

3.5.4. 場の特徴

「女子が集まること」が困難だったという回答は、更衣室、トイレ、行事、その他の場面から得られた。他者との「距離が近いこと」の困難は、トイレ、更衣室から得られた。「女子が集まること」「距離が近いこと」に関するこれらの困難から、【場の特徴】というカテゴリを抽出した。このカテゴリには18.6%の回答が該当し、それらは小学校・中学校・高等学校のいずれの段階からも出現した。

3.5.5. 性自認と空間の相違

「漠然とした嫌悪」を感じるという回答は、更衣室、トイレから得られた。また、「性自認」と使用するトイレとの違い、制服のスラックス姿で女子トイレを使用す

る嫌悪感（「服装」）、好きな女性と同じ女子トイレを使用する困難（「性的指向」）、ふだん一緒にいる「友人関係」（男友達）とは異なる性のトイレを使用する違和感、という回答がトイレの場面から得られた。「漠然とした嫌悪」「性自認」「服装」「性的指向」「友人関係」に関するこれらの困難から【性自認と空間の相違】というカテゴリを抽出した。このカテゴリには9.3%の回答が該当した。

3.6. 各項目が内包する困難の構成要素

表8では、質問紙で提示した困難項目（表6参照）についてのインタビューから抽出した困難のカテゴリ（表7参照）を整理し、学校生活で困難を感じていた項目ごとに困難の構成要素を示した。

「トイレ」と「更衣室」は、【男女の区別】【周囲の視線】【場の特徴】【性自認と空間の相違】という共通する構成要素による困難だった。「制服」は【男女の区別】【ジェンダー】によって困難が生じており、「学用品」の困難の構成要素と同じだった。「水着」は【男女の区別】【周囲の視線】による困難だった。

その他、修学旅行等の「行事」については【男女の区別】【周囲の視線】【場の特徴】による困難、「髪型」の校則は【ジェンダー】による困難、「体育の授業」「名簿」「その他の授業」は【男女の区別】によって困難が生じていた。

4. 考察

4.1. 学校環境整備の必要性

4.1.1. 性別違和の気付き・確信の時期

本研究で調査対象としたFtM当事者は、「性別にもとづく扱いの差異に対する違和感」「身体的性に対する違和感」「性的指向に対する違和感」「性自認」がきっかけ

表8 学校生活で困難を感じていた項目と困難の構成要素

	男女の区別	ジェンダー	周囲の視線	場の特徴	性自認と空間の相違	計
トイレ	8.1		6.4	8.7	5.8	29.0
更衣室	4.7		5.8	7.0	3.5	21.0
制服	0.6	19.8				20.4
水着	3.5		7.0			10.5
行事	1.7		2.3	2.3		6.3
学用品	2.3	2.9				5.2
体育の授業	2.9					2.9
髪型		2.3				2.3
名簿	0.6					0.6
その他の授業	0.6					0.6
その他	0.6			0.6		1.2
計	25.6	25.0	21.5	18.6	9.3	100.0

(%)

になって、93.3%が小学校卒業までに、全員が中学校卒業までに、性別違和に気付いていた(表2, 表4参照)。そして「ロールモデルとの出会い」「性的指向・パートナーとの関係」「診断」「嫌悪感」によって、73.4%は高等学校卒業にあたる18歳までに性的違和を確信していた(表2, 表5参照)。気付きから確信までの期間は平均9.71年($SD5.72$)と個人差が大きかったが(表3参照)、その期間は身体的に不安定な思春期と被る。セクシャリティに配慮した学校環境整備はできるだけ早い段階から行われる必要があると考えられた。

4.1.2. カミングアウト

小中高生の時に確信した性別違和について、小中高生の時に誰かに相談やカミングアウトができた当事者は全体の33.3%であった。小中高生の時に相談やカミングアウトができなかった理由は、「理解してもらえないと思っていた」「人に言っではいけないことだと思っていた」という回答が複数得られた。このことから、小中高の学校現場では、性別違和について誰かに相談できないまま、1人で悩んだり不安に思ったりしている児童生徒がいることが示唆された。

他方、中学生の時に性別違和を確信して、親にカミングアウトをしたケースが1例あった。そのケースでは、親がトランスジェンダーについて調べ、子どもが中学校3年生の時には教員を交えて3人で話す機会を持ち、高校での性別登録をどうするかなどについても話し合っていた。

学校現場には、性別違和について教員に相談できる児童生徒も、誰にも相談できない児童生徒もいる。だからこそ、セクシャリティのカミングアウトの有無に関係なく、児童生徒が安心して学校生活を送ることができるような学校環境整備が急務だと考えられた。

4.2. 性別違和による学校生活における困難の構成要素

トランスジェンダーの児童生徒に配慮した学校環境整備を指向して、FtM当事者が学校生活で何にどのような困難を感じていたのかを分析した。その結果、当事者の多くは、小中高の段階に関係なく学校の「トイレ」「更衣室」「水着」に困難を抱き、中学生以降には「制服」にも困難を抱いていた(表6参照)。

4.2.1. 「トイレ」「更衣室」

学校生活における「トイレ」「更衣室」の困難は、【男女の区別】【周囲の視線】【場の特徴】【性自認と空間の相違】から生じていた(表7, 8参照)。

「トイレ」「更衣室」は男女を区別するマークや空間があることに加えて、身体的性が同じ集団のコミュニティが形成されやすく、また、空間内のパーソナルスペースが狭くなりやすい。そのために「トイレ」「更衣室」には【周囲の視線】【場の特徴】によって生じる困難があり、

当事者にとっては逃げ場のない居心地の悪い空間になると考えられた。

これへの対応としては、愛知県豊川市の小学校の取り組みがある⁽⁹⁾。廊下からトイレの入り口が見えないようにするための「前室」を設置し、「前室」を入って右に多目的トイレ、さらに奥に進んで男女別トイレをそれぞれ設置したことが報告されている。この例から、【周囲の視線】【場の特徴】による困難が生じる「トイレ」「更衣室」は、空間のデザインの工夫によって視線や動線をコントロールできると考えられた。

「トイレ」「更衣室」の困難については、当事者から「プールの更衣室へ入る時は暗闇の中を通るような漠然とした嫌な感覚があった」「なぜ女子用の方にいるのだろう」「何かいけないことをしているような感覚があった」などの語りも得られた。男女で区別された空間のうち身体的性の側に入室すること、すなわち、性自認とは異なる方の「トイレ」「更衣室」に身を置くことそれ自体が、当事者には言いようのないストレスになる場合があることが示唆された。「トイレ」「更衣室」では【性自認と空間の相違】によって困難が生じていた。

これについては、男女共用の個室空間の導入が有効ではないかと考えられた。男女共用の個室空間については、TOTO株式会社から多様なセクシャリティが心地よく使える男女共用個室のバブリックトイレが発表された⁽¹⁰⁾⁽¹¹⁾。学校では、愛知県豊川市の小学校の先進的な取り組みがあり、男女別トイレと同じ場所に男女共用トイレ(全室個室)や多目的トイレを設置したことが報告された⁽¹²⁾。すなわち、【性自認と空間の相違】による困難は、男女で区別しない空間があることによって軽減されるのではないかと考えられた。

他方、平成26年度文科省報告⁽⁴⁾によれば、「トイレ」に対する学校の配慮は、セクシャリティをカミングアウトした児童生徒に対して職員トイレや多目的トイレの利用を認めるという対応が多く報告された。「更衣室」への配慮は、カミングアウトをした児童生徒に保健室の利用を認める、多目的トイレでの更衣を認めるという対応であった。現状では、男女別に分かれた「トイレ」「更衣室」空間で生じる困難は、空間の機能の転位によって対応されていることが多い。この対応からは、カミングアウトをしていない児童生徒の多くが男女別の空間で我慢を強いられているのではないかと推察された。

4.2.2. 「水着」

「水着」の困難は、【男女の区別】【周囲の視線】という要素によるものだった。「水着」のデザインが男女別であることや女子用を着用すること、身体を見られることに対する困難があった(表7, 8参照)。

4.2.1に記した空間の視線や動線をコントロールするような環境整備によって、更衣室のなかで水着姿を見られ

ているのではないかという【周囲の視線】による困難を軽減できたとしても、プールで生じる【周囲の視線】による困難は残る。

当事者からは「胸のふくらみを見られたくなかった」「ワンピース水着はVラインがギリギリなのが嫌だった」が、「諦めて着用した」「ラッシュガードの着用を相談したが拒否された」「水泳の授業は欠席した」という自身の対応が語られた。

平成26年度文科省報告⁽⁴⁾によると、「水着」に対する学校の配慮例は、MtFの児童生徒に対して上半身が隠れる水着の着用を認める、補習をする、代替課題を提出させるなどであった。本調査においては「ラッシュガードの着用を許可してもらった」「ワンピース水着ではなくツーピース水着が良かった」という当事者の語りもあった。

このことから、「水着」に対する【周囲の視線】の困難は、露出面積の少ないデザインや身体のラインが露わにならないデザインのものを認めるという学校側の対応によって軽減できると推察された。

4.2.3. 「制服」

「制服」の困難は、【男女の区別】【ジェンダー】という要素によるものだった（表7、8参照）。

当事者からは、小学校時代の制服（帽子）に男女別のデザインがあったことへの嫌悪が語られたが、「制服」に対する困難は、概ね中学生以降に出現した。その多くは、制服について、身体的性にもとづいて周囲から求められるものと当事者が持つジェンダー規範の間での葛藤であった。特に、スカート＝女子というジェンダー規範に対し拒絶感を抱くものが多かった。制服のセーラーに対する嫌悪は中学生の時、リボンに対する嫌悪は高校生の時に出現した。

平成26年度文科省報告⁽⁴⁾では、「制服」に対する学校の配慮例としては、自認する性の制服の着用を認める、体操着による通学を認めるなど、トイレへの配慮例に次いで多く報告された。他方、制服の製造販売を行う株式会社トンボは「ジェンダーレス制服」を提案した⁽¹³⁾。前合わせの左右が変えられるジャケットや身体のシルエットが強調されないスラックスなどの「男女兼用」や、スカート、スラックス、ネクタイ、リボンの「組み合わせの自由化」の制服である。「ジェンダーレス制服」を新たに導入したりスラックスのみ追加導入したりした全国の中学校・高等学校は、2018年で370校、2020年で750校、2021年では1000校を超えた⁽¹⁴⁾。本研究で抽出した【男女の区別】【ジェンダー】による「制服」の困難は軽減できる可能性が高いと推察された。

5. 結語

本研究では、トランスジェンダーの児童生徒に配慮した学校環境整備を指向して、FtM当事者が学校生活で何にどのような困難を感じていたのかを分析した。ジェンダーレスなデザインの「制服」、露出面積の小さいデザインや身体ラインが強調されないデザインの「水着」を採用することは、教員に適切な対応を促すことと並行して整備が可能だろう。他方、「トイレ」「更衣室」で生じる困難に対しては、空間の機能の転位だけではなく、視線や動線に配慮したデザインや男女共用個室の必要性が考えられた。そのため、第2報では、学校トイレのデザインについて追究する。また、セクシャリティにかかわらずストレスを感じるものがない学校づくりに向けて、今後はMtF児童生徒の性別違和についても分析する必要がある。

参考文献

- (1) 筒井真樹子 (2003a) ヴァージニア・プリンスとトランスジェンダー. 米沢泉美編著「トランスジェンダリズム宣言」, 130-139. 社会批評社, 東京都.
- (2) 筒井真樹子 (2003b) アメリカのトランスジェンダー・アイデンティティ. 米沢泉美編著「トランスジェンダリズム宣言」, 140-149. 社会批評社, 東京都.
- (3) 独立行政法人教職員支援機構：学校で配慮と支援が必要なLGBTsの子どもたち：校内研修シリーズNo87. <https://www.nits.go.jp/materials/intramural/087.html> (2022.4.18入手)
- (4) 文部科学省 (2014)：学校における性同一性障害に係る対応に関する状況調査について https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afiedfile/2016/06/02/1322368_01.pdf (2022.4.18入手)
- (5) 文部科学省 (2015)：性同一性障害に係る児童生徒に対するきめ細かな対応の実施等について https://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/27/04/1357468.htm (2022.4.18入手)
- (6) 天野佑美, 佐々木新, 松本洋輔, 大守伊織 (2019) 性別違和を持つ患者の診療録から見える学校生活場面での困難さ. 兵庫教育大学教育実践学論集, 20：39-48.
- (7) LGBT総合研究所：LGBT意識行動調査2019 https://www.daiko.co.jp/dwp/wp-content/uploads/2019/11/191126_Release-1.pdf (2022.4.18入手)
- (8) 土肥いつき (2015) トランスジェンダー生徒の学校経験－学校の中の性別分化とジェンダー葛藤－. 大阪府立大学大学院教育社会学研究, 97：47-66.
- (9) TOTO株式会社：施行事例（トイレ・洗面・浴室）, 豊川市立一宮西部小学校. <https://jp.toto.com/com-et/jirei/1877/> (2022.4.18入手)
- (10) TOTO株式会社：多様なセクシャリティーLGBTーが心地よく使えるパブリックトイレとは？ <https://jp.toto.com/ud/summary/post08/> (2022.4.18入手)
- (11) TOTO株式会社 (2018)：性的マイノリティのトイレ利用に関するアンケート調査結果.

- <https://jp.toto.com/ud/summary/post08/report2018.pdf>
(2022.4.18入手)
- (12) TOTO株式会社：施行事例（トイレ・洗面・浴室），豊川市立豊小学校.
<https://jp.toto.com/com-et/jirei/2021/>（2022.4.18入手）
- (13) 株式会社トンボ：学校制服，ジェンダーレス制服.
- <https://www.tombow.gr.jp/school/original/genderless/>
(2022.4.18入手)
- (14) 朝日新聞EduA：「採用増える「ジェンダーレス制服」，誕生の背景は トンボのデザイナーに聞く」
<https://www.asahi.com/edua/article/14314851>（2022.4.18入手）

